

## 久し振りの歌舞伎

内藤 真理子

十年ぶり位に歌舞伎を観に行った。

国立劇場の初春公演で、半蔵門の劇場は建て替えのため初台の新国立劇場中劇場での公演だった。

友人と待ち合わせてポスターに見入っていると、劇場内には和服姿の人もちらほら。主演は尾上菊五郎である。

「見る方も気合が入っているわねえ」と友人達。

私も、気合を入れてプログラムを買った。

最初の演目の「梶原平三かじわらへいぞうほまれのいきり誉石切」が始まった。

舞台上に大きな鳥居、その脇に神社特有の石の手水鉢が目立つ。

舞台上には左右に別れて何人かの役者がせりふの応答。そこに尾上菊五郎扮する梶原平三がやってきて貫禄たっぷりに中央に座り、盃を酌み交わし始める。

だが、観ていてもあまりに久しぶりの所為か、言葉が理解できない

字幕が欲しい！

友人たちと顔を見合わせると同じ状況らしい。慌ててプログラムを取り出してあらすじの回し読みをする。

舞台上では子役が踊りを披露していた。可愛いらしい。役者の子供たちは学校から帰ると、猛練習をするのだろうと想像すると微笑ましい。

子役や女形の踊りをはさんで物語の本筋になった。

あらすじを読んだおかげで、役者のせりふも話の筋も良く解る。少し余裕が出て周りを見ると、客席は静まり返り、話の筋に沿って、かたずをのんで舞台を見つめているのがわかる。

場所は鶴ヶ岡八幡宮鳥居前。源頼朝軍に勝った平家方の大名たちが、勝利を喜んでいる場面。

そこに源氏再興のための軍資金を工面するために、源氏方の武将の許嫁、梢とその父が登場する。戦勝祝いをしている平家方の大名の一人が、かねてより梢の父が持っている家宝の名刀を欲しがっていたので、娘のために買って欲しいと頼みに来たのだった。

そこで居合わせた梶原平三が、刀の目利きであることから鑑定を頼まれる。

そこから芝居の見どころで、試し切りに囚人を連れて来たり、娘の父親が試し切りされそうになったり……。その度にハラハラドキドキ。気が付けば芝居に入り込んでいた。歌舞伎を観た感激は私を幸せな気分にくれ、いつまでも余韻が残った。

ちなみに、誉の石切りは、手水鉢を真二つに切った名刀の証だった。